13. 水害多発地域における環境認識に関する研究

久島桃代

1. 本研究の目的

本研究は、濃尾平野を中心に木曾三川流域に暮らした人々の環境認知、とりわけ水害に対する認知を現地の民話から探る試みである。東から木曽川・長良川・揖斐川という大河川が流れる濃尾平野では、東高西低の地形条件によって木曽川、長良川が網目状に揖斐川に乱流し、いくつもの川島が生まれた。また、この地域は多雨地域でもあり、豪雨の際には木曽川の水が長良川・揖斐川に流れ込んで逆流や洪水が起き、そのたびに川島では大きな被害が出た。そしてその結果、堤防によって周囲が取り囲まれた「輪中」が発達した。

こうした自然条件にあって輪中をはじめ木曾三川流域には、水害に関連した民話が非常に多く残されている。その中には、龍・蛇が水神として登場するものも多い。前者は想像上の生き物であり、後者は水辺に生息する実在の生き物だが、水害発生の要因をこれら水神の力に帰することで、環境がもたらす予測不可能な出来事にある種の折り合いをつけてきたように思われる。こうした考え方を、科学法則による因果関係の解明や、これに依拠した具体的なハード対策が確立される以前の「迷信」と片づけることもできるだろう。しかし、これを一種の災因論（長島1987；エヴァンズ＝プリチャード2000）と考えればどうだろうか。そこからは、こうした物語が口伝えに語り継がれてきた時代の、木曾三川流域の固有の時間と空間が浮かび上がってくる。

また、民俗学者の柳田國男は、民話の中でも「できるだけ固有名詞でもって真実めかし、其の時代を示し、其の由来を根拠づけて信を置き得るやうにする」ものを「伝説」と定義し、その基礎には信仰があるとした（柳田1934＝1998、p.159）。柳田の言に従えば、木曾三川流域に分布する洪水をめぐる民話も、そこで生きた人々の自然への信仰をうかがい知ることができるはずだ。さらに、同じく民俗学者の野本寛一も、地域の暮らしに密着した神々をめぐる物語の中に、柳田と同様、そこで生きた人々の環境へのまなざしを看取しようとする（野本1999）。そこで本研究では、木曾三川流域に残る民話から、地域の人々がどのように周囲の環境を認識していたのかを検証したい。

2. 研究方法

昨年度から開始した本研究では、国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所が発行する季刊誌『KISSO』の１号から100号に掲載された、「水にまつわる民話」を資料とする（図1）。その舞台となるのは、輪中を含んだ木曾三川流域一帯である。そこでは、干ばつや洪水、土砂崩れといった水害が珍しくなかった。そのため本研究では、これら輪中以外の地域の民話も分析の対象とした。

前稿（久島2021）では、『水にまつわる民話集』に収められた民話の特徴を、登場する龍・蛇の描写の仕方に着目して明らかにした。また、人間と自然の関係に民話からアプローチする有効性について、文学作品から環境問題を議論している「エコクリティシズムEcocriticism」と呼ばれる分野の動向を紹介した。そこで本稿では、前稿では不十分だった、龍・蛇をめぐる伝承に関する地理学以外の分野での諸研究を検討し、改めて本研究の意義を考えたい。

図１　『水にまつわる民話集』
季刊誌『KISSO』の１号から100号に掲載された「水にまつわる民話」は、創刊100号を記念して『水にまつわる民話集』にまとめられた。

3. 龍・蛇をめぐる伝承文学へのアプローチ

龍・蛇をめぐる信仰、伝承に関する研究は、古典文学研究、宗教研究、民俗学、地理学と、多岐にわたる分野で行われている。地理学については前稿（久島2021）で詳述したため、ここではこのうち、古典文学研究・古典芸能研究、民俗学の研究成果を取り上げる。

3.1　古典文学・古典芸能研究

この分野では、古代中世の古典文学や古典芸能に登場する龍・蛇を取り上げ、中国の思想や文化、仏教思想との関りからその象徴的意味を読み取ろうとする。例えば森（2019）は、今昔物語集や宇治拾遺物語といった伝承文学では、龍と蛇は一括して扱うべき（「龍蛇」という呼称の採用）と前置きしたうえで、仏教説話集において龍蛇は罪障深い存在であること、仏法によって制圧され、追放されるべき存在として位置づけられると指摘する。

しかし、前稿の最後（久島2021）で指摘したように、木曾三川流域の民話の中には、近世以降、低湿地の新田開発が進んで堤防が築かれる段階においても、度重なる築堤の失敗を川に住む神である白竜に求めるような信仰が存在した。具体的な時間―空間において龍・蛇をめぐる物語を読めば、そこには古典文学研究、古典芸能研究が提示する一般化に該当しない例は容易に発見できる。

このことから、日本における古典文学・古典芸能研究では、物語が語り継がれる個別具体的な風土に対する視点は弱かったといえる。その意味で、前稿で論じたエコクリティシズムは、文芸作品における環境表現を批評するという点で、可能性を秘めるものであろう。

3.2　民俗学

民俗学における伝承研究の第一人者は、言わずと知れた『遠野物語』で知られる柳田国男である。遠野に限らず、柳田は日本各地の伝承を収集し、起源の検証や類型整理、海外の類話との比較研究を行った（柳田1942）。柳田によれば、民間説話には民族ごとに独立した背景があり、源流を遡れば神話に行きつくという。柳田の視点は、伝承世界における空間―時間を個別具体的に検討するというよりは、民族の単位で、総括的に考察するものであった（赤坂2013）。伝承に対するこうしたアプローチの仕方は、関敬吾による全10巻にわたる『日本昔話大成』にもつながる。

一方、各地に残る伝承を、当地固有の民俗との関りから具体的に検討しようとしたのが野本寛一である。神観念と環境観の関係を解き明かした野本（1999）はその一例である。それによれば、神観念は3種に分類される（図２）。第一に、神話・古典に登場する神道的な神であり、神社に祭られる「神」である。日常の暮らしで日々実感するような存在ではなく、抽象度が高い。第二に、人々の暮らしのより近い場所にいる神々で、各イエやムラ、生業空間で祭られる「カミ」である。山の神、龍宮神、そして本研究が対象とする水神はここに分類される。第三に、祭られる前の「カミ以前」の存在といえる、民俗的に伝承された霊的存在である「モノ」である。ここには、池や淵や沼などの主や樹木の精などが含まれる。

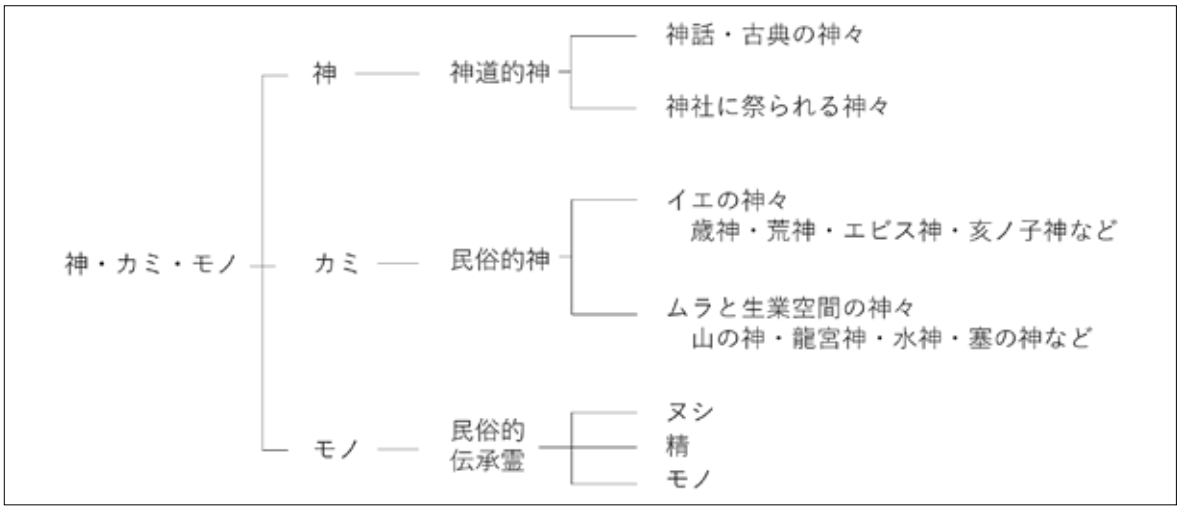

図２　神観念の分類
野本（1999：87）より作成

これら３種の中でも、野本が特に着目するのが、「モノ」に分類される神である。「モノ」は、「神」や「カミ」と違って、それを祀り具現化する神社や石碑といった装置なしにあるもののとされてきた。「モノ」が存在する根拠は、山や池や沼に「確かにいる」というリアリティであり、このリアリティが、口から口へとモノをめぐる物語が信ぴょう性をもって伝えられることを可能にした。この意味で、「モノ」をめぐる物語は、神観念のなかでももっとも人々の暮らし近いところから生まれ、伝えられてきたものだといってよいだろう。

4. まとめ

先行研究の検討から、民俗学では、神に関する伝承の中でも、とりわけ祭祀の対象とならない「モノ」こそが、地域で暮らす人々の暮らしの中から生まれ、リアリティをもって語り継がれてきたものとして、環境観を探る上で注目に値することが判明した。

『水にまつわる民話集』に登場する水神を確認すると、木曽三川流域には「神」「カミ」「モノ」いずれの神も存在する。野本が提起する神観念の区分に従い、この地域の水神がどのように想起されてきたのか（祭られてきたのか、口伝のみによる信仰なのか）という点も、龍・蛇の表象と同様、伝承と環境との関りを考える際に有効な視点だろう。

参考文献

赤坂憲雄：新版解説．柳田国男『桃太郎の誕生』，角川書店，2013.

エヴァンズ＝プリチャード、E.E.（向井元子訳）：アザンデ人の世界―妖術・託宣・呪術，みすず書房，2001.

木曽三川歴史文化資料編集検討会編：水にまつわる民話集：KISSO創刊一〇〇号記念特別号，国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所，2017.

久島桃代：人と、水と、龍と：水害多発地域の民話に見る自然と人間の関係，愛知工業大学地域防災研究センター年次報告書，vol.17，pp.67－73，2021.

関　敬吾：日本昔話大成（１～10巻），角川書店，1978-1980.

長島信弘：死と病いの民族誌―ケニア・テソ族の災因論，岩波書店，1987.

野本寛一：環境観と神観念．鈴木正崇編『大地と神々の共生　自然環境と宗教（講座人間と環境10）』，昭和堂、1999.

森　正人：龍蛇と菩薩，和泉書院，2019.

柳田國男：民間伝承論，共立社，1934（＝（1998）『柳田国男全集』8　筑摩書房）